

-----  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

-----  
「共同利用・共同研究課題「チベット・ヒマラヤ牧畜文化論の構築—民俗語彙の体系的比較にもとづいて—」(2020年度第2回研究会)

2020年7月25日(土曜日)午後13時より午後17時、2020年7月26日(日曜日)午前9時より午後12時

オンライン開催

本共同研究課題の第2回目となる研究会は2日間にかけて行われた。

まず、1日目の内容についてまとめる。

小野田氏は「チベットの断食儀礼について」と題して、インドのヴェーダ時代における事例や、現代のチベット・ヒマラヤ社会で続いている断食儀礼の実践の例が紹介した。特に注目された点は、ヴェーダ時代の祭式において、ソーマという植物と乳製品を混ぜ合わせた飲料を飲んでいたという記述であり、乳文化の専門家からもその効能について情報が寄せられた。別所氏の「ネパール・ヒマラヤ地域における宗教文化語彙の予備的現地調査」という報告では、ネパール、ヒマラヤにおける現地調査で見聞した宗教儀礼の報告ののち、宗教文化の体系比較のための作業仮説および、比較の案が披露された。参加者からは、具体的な情報を用いたマッピングの例を求める声がみられた。「土着」の定義の難しさについても意見が出た。海老原氏の「家畜の認識語彙の体系比較に向けて」という発表では、アムド、ブータン、ネパールの現地調査で収集したヤク・ゾの認識語彙が整理・紹介され、その比較について毛色ごとに地図にマッピングする例が提示された。参加者からは、古代チベット語文献でも家畜の毛色語彙がみられる事実が紹介され、「亜麻色(茶色)」を表す語彙の多様性、アムド内での地域差がある可能性についての意見があった。星発表では、「ラシャムジャ著『M村民俗誌』紹介：その文学的かつ百科事典的アプローチに注目して」と題する発表が行われ、本研究会でもデータとしての利用が有力視されている『M村民俗誌』の概要説明と作業予定が示された。参加者からは作業への参加の希望や、目次の作成の仕方が仏教書と類似している点の指摘があった。

次に2日目の内容をまとめる。発表を予定をしていたナムタルジャ氏は急用で参加がかなわず、発表はキャンセルされた。

長岡氏の「暮らしにおけるヒマラヤ高山植物の利用と民俗語彙」では、ヒマラヤ高山植物への欧米や現地での関心を導入とし、アルナーチャルの生業、薬草と人々の関係、薬作りをする人々の存在が紹介された。特に、タワンでは牧畜民がアムチ(チベット医)、村人の仲介となって薬草を採取するネットワークがあることが示された。参加者からは、アルナーチャルの「湿潤性」と関わる文化語彙の有無についてや、納豆文化と熟成チーズの関係などが指摘さ

れた。植物を呼びかける色彩語彙については、湿潤な地域であることで色彩が豊かである可能性も言及された。発表者からは、現地調査に行けない状態でどのように調査を続けていけるかという全体に関わる問題が提起された。辞典や、国立科学博物館に所蔵された旅行者による植物標本の利用の可能性についても助言があった。

最後に、体系比較に関するアイデアについて、5名から提案があった。

総合討論では、班による作業の進め方に関する提案、最終的な成果物の形態の確認、コロナ禍での研究の進め方について議論された。成果物については、当初予定していた地図付きの論集の出版が現地調査なしでは実現性が低いことから、論集を成果とすることとなった。研究の進め方については、文献を用いた通時的な研究や、辞典などのデータを用いた研究をメインとすること、調査票整備も進めていきたい旨が提案された。

2日間のオンライン会議は体力的に疲労するという意見もあり、今年度はオンライン会議の場合はできるだけ1日開催で行うことにしたい。

以上